

授業公開の報告

人間科学部 吉 田 悟

<公開した授業>

*科 目 名：「キャリア形成論」

*公開日時：2009年11月13日（金）4限

*教 室：725教室

I 公開授業の感想

1. 本授業の主旨

当該科目は、学部再編に伴い昨年度新設された学部教養科目（秋学期、金曜日、4時限）ある。新カリ科目なので、現時点では履修者は1・2年生に限定されているが、今年度においても約250名が履修している。教室は725である。

キャリア教育において、私は、主に以下の4点が重要であると考えます。第1は、履修者が自身の指向や興味に気づくことである。第2は、目標達成遂行を妨害するような心理的問題に取り組むことである。第3は、目標設定や問題解決のための方法、重要情報源とそのアクセス方法について理解することである。第4は、キャリアに関する観察・体験学習とその振り返りである。この授業は、この4つの課題のうち、第1に焦点をあてている。

この4つの課題を1科目で教育・支援することは、不可能である。例えば、第2の問題は、不健康な感情と機能不全な認知への対応が重要であり、認知行動アプローチの学習が必要である。この問題は、共通教養の心理学（今年度、春学期、月曜日、2限）で、主に扱っている。第3の問題は、問題解決モデルの理解と実際のキャリア関連情報・資源へのアクセスに関する。問題解決モデルに関しては、産業教育（今年度、秋学期、月曜日、5限）で扱っている。また、実際のキャリア関連情報・資源へのアクセスに関しては、キャリア支援課が主催するセミナーや指導などがこれに対応しているであろう。第4は、就業者から仕事の諸側面についての話を聞くこと、アルバイト体験、インターンシップ体験、などの就業に関する観察学習および体験学習がそれにあたるだろう。

現状において、日本的経営の崩壊、人事制度の多様化、人生経路の多様化などから、我々自身が主体的かつ個人の責任で人生設計することが、ますます重要になってきている。我々は、このような状況で生きていることを念頭に置いて、仕事の領域における成果(performance)と安寧(well-being)の維持・向上を目指す必要がある。このような社会状況において、どうしたら、安定的かつ長期的に、安寧と成果を維持・向上することができるだろうか？

多くのキャリアに関わる実践家は、安寧と成果へと至る一つの方法として、指向、指向の組み合わせであるタイプ、タイプダイナミクスの気づきが重要と、認識してきた。現在、キャリアに関わる実践において、MBTIは、主要な支援ツールとして活用されている。以上

のような見地に立ち、本授業では、MBTI の基礎的理解を目標とする。

2. 公開当日の授業実施概要

11 月 13 日（金）4 限が授業公開日時であった。授業の内容は以下の通り。

(1) T（思考）・F（感情）指向に関するグループワークの全体でのシェアと理論学習（60 分：①～④が 40 分，⑤～⑥20 分）

①前週行ったグループワークの結果報告。T・F グループ別に、2 つの課題について発表すること。前回の各グループでの結果を文書化したものを履修者に配布し、それを私が読んで報告する。

②T・F グループで出された発表に関して、タイプ言語を中心に、私が解説すること。

③教科書、配布資料を使って、T・F の指向に関する理論的な整理と確認をすること。

④発表（①）と解説（②・③）に基づいて、履修者個人が気づいたこと、感じたことを振り返り用紙に記入すること。

⑤個人の気づき・気持ちをグループでシェアする

⑥T・F のグループの代表者が、グループで出された気づき・感じたことを、全体に向けて発表すること。

(2) タイプ調べ（20 分）

前回と今回の授業で、T・F 指向に関して、グループワーク、振り返り、理論学習が終わった。これまでに、I・E・S・N・T・F の指向に関して、グループワーク、振り返り、理論学習が一通り終わった。そのことを踏まえて、ここでは、自分の周りの人が、外向場面でどのような指向が顕著に表れているかをチェックするワークをする。

このワークの目標は、指向の理解を自分自身の体験とからめて深めていくこと、体験学習および理論学習で得た知識を日常生活で活用していくことを促すこと、J・P 指標の理解の支援などである。

①説明

②周囲のひとの外向場面で顕著に表れている指向を記入（7 名まで）

③振り返り用紙に気づいたこと、感じたことを記入すること。

(3) 今日の授業のまとめ（10 分）

3. 振り返り

公開授業の聴講者からの批判的フィードバックは、以下の 2 点であった。

(1) 体験学習の時間をもっと増やした方がいい

本公開授業の内容は、前週のグループでの体験学習を踏まえた、全体での振り返りと理論学習であった。したがって、体験学習、具体的な作業が少ないという印象を抱かれたのだろう。その前週は、T・F 指向の 2 つのグループワーク、グループレベルでの振り返りなどに、授業の大半の時間を当てていた。

授業は、個人やグループでのワーク、振り返り、理論学習のバランスが重要である。本授業では、この 3 つは 1 回の授業でバランスするといった方法をとらずに、全体でバランスするという方法をとっている。

(2) ワイヤレスマイクの活用

学生がワークをしている際に、ワイヤレスマイクを使った方がいいという指摘を受けた。

この指摘はもっともである。ワイヤレスマイクが使用不能な教室であると認識していた。教室環境のチェックを、再度確認することが必要であることを、認識した。

II 授業改善への今後の取り組みについての意見・感想

1. 体験学習型の授業に必要な履修者数と教室環境の整備

この授業は約 250 名履修の講義であるが、グループワーク、振り返り、理論学習の 3 つから構成される授業を行っている。体験学習型の授業は、授業への関与の促進、学習者が主役になること（聞き役、授業を受ける側ではなく）、履修者が授業で得た知識・技能を日常生活で活用する傾向が増すこと、履修者の満足度が講義形式よりも高いなど、肯定的面が多いと感じる。特に、この授業でワークを多く取り入れている理由は、心理学の専門教育という面だけでなく、就業前教育、社会人基礎力の育成という面での効果を、期待してのことである。しかし、効果的な体験学習型の授業を行うには、履修者約 250 名は多過ぎる。教室環境も、725 に限らず、グループワークが行えるような教室はほとんどない。

2. 効果の観点

最近では、心理学の実践においては、効果が重視されるようになってきた。効果がない処遇は意味がないという考えが、英米では常識になりつつある。これは、授業にもあてはまる。つまり、効果に基づいた教育である。

社会人基礎力などのコンピテンシーの開発に関わるような授業の場合、授業満足度とは別に、これらを基準変数にした効果を査定して、授業改善に資することが重要だろう。信頼性と妥当性を兼ね備えた査定具の開発、事前事後の実査、分析・検討、履修者へのフィードバックが重要である。履修者全体だけでなく、履修者個々人に対してこれらの測度をフィードバックすることにより、個々人の実状に応じた目標設定とその達成度の把握など、よりきめ細かで効果性のある教育が可能となるだろう。私自身は、このような認識から、来年度 4 月より、演習・実習に関しては、適切で妥当な基準変数を採用して、授業効果を把握する試みを開始するつもりである。

3. 社会人基礎力（あるいは学士力）の観点

文教大学の授業（教育研究所 HP、私の所載箇所参照）で記述したように、近年、大学で社会人基礎力といったコンピテンシーの開発が求められている。これをテーマに、教育やビジネス系学会で研修会やシンポジウムが数多く開催されている。一方、本学では、これへの関心は低いと感じるが、如何であろうか？

ポイントは、このような新しい人材育成の要請に答えることは、従来型の授業科目と講義中心のやり方では、不可能ということである。これは、既存のカリキュラムと講義中心の授業を変革することなく、教員個々人で対応できる問題ではない。早急に、学長のリーダーシップのもと、社会人基礎力を育成する上で、本学で、何が必要か何が不足しているかを検討する必要がある。さらには、年次別の達成目標と達成度を明らかにすることなど、も重要である。私は、特に、卒業時において獲得すべきコンピテンシーの具体的内容とレベルを保証することは、学生確保（大学経営）の観点からも重要と、考える。